

「ことだ」に関する一考察

－そのモダリティ性を探る－

坪根 由香里

キーワード：モダリティ 形式名詞 助動詞 主題 客観性

〔要旨〕 「ことだ」のモダリティは①「XはYだ」という構文の「Xは」の部分は話し手・聞き手双方が認識可能な場合に省略され、「こと(だ)」はその省略された主題に対応するものとして存在する。また、②「ことだ」の各用法はその主題の復元のしやすさの程度に差があり、その程度によってそのモダリティ度にも違いがある。筆者はこの二つの仮説をたて、その検証を行った。①の仮説については話し手・聞き手双方が認識している事象についてのみ主題が省略され、それによって文が不完全なものになり、「ことだ」が色々な意味を持っているかのように見えるのだと考える。②の仮説については、「ことだ」には、それ自体強く一体化していてかなり高いモダリティ性を持つものと、形式名詞「こと」＋コピュラ「だ」とは言いにくい、それに近く、モダリティ性はあまり感じられないがようなものがある。理由・根拠を表す用法はかなりモダリティ度が高いが、「ことだ」で助動詞として理由や根拠を表すというより、「こと」が「主観回避」的なニュアンスを加えていると考える。

従って、言い換え・要約の用法→伝聞の用法→感嘆・感動を表す用法→「～することが大切／必要だ」の意味を表す用法、理由・根拠を表す用法の順で助動詞化が進み、これらは形式名詞「こと」＋「だ」から助動詞化した「ことだ」への連続した線上に点在することを明らかにした。

1. はじめに

いわゆる形式名詞と呼ばれるものは多くあるが、中でも「もの」と「こと」は共に実質名詞、形式名詞としての用法から、文末に現れる「ものだ」「ことだ」や終助詞化した用法も持つという極めて用法の広いものである。本稿ではそのひとつである「こと」にスポットを当て、まず実質的な意味から探り出し、それを踏まえて「ことだ」の意味・用法について考えていきたい。

「ことだ」という形には「こと」＋「だ」ととらえた方がよいものと、「ことだ」全体でモダリティを持つものとしてとらえた方がよいものの2種類あると考えられるが、その

線引きをどこにするかは難しい問題である。先行研究を見ると、寺村（1984,1992）のようにモダリティ（寺村は「ムード」と言っている）を表す「ことだ」には、「何々することが大切だ、必要だ」を端折っている言い方と、感嘆・意外（時に心外）を表す言い方の2種類あるとしているものと、備前（1989）のように8つもの用法をあげているものがある。そしてその違いはどこまでを「ことだ」全体でモダリティを持つものとして考えるかによる。

寺村の言う2種類の用法の例は以下の通りである。

- (1) a. 早く沢田さんに遺言書を書いてもらうことだ。
- b. 今になって、よくもそんなことが言えたことだ。

寺村（1984: p.297）

確かに、「ことだ」の主な用法はこの二つであり、この二つは佐治（1991）でもあげられている。佐治は、「のだ」との比較において「ことだ」の意味を探り、その中で「勧誘・当為」と「詠嘆」の二つの用法について述べている。しかし、モダリティを含む「ことだ」の用法をすべてあげるとするなら、これでは不十分かもしれない。「ことだ」の用法に関する詳細な考察がなされているのが備前（1989）である。備前はまず「ことだ」を、

- 1. 「～こと」の部分は単に「ことがら」描写に参加するだけ、「だ」は描写された「ことがら」全体を文として成立させ、肯定するだけの働きしか果たしていないと考えられるもの
- 2. (前略)「～ことだ」全体で「ことがら」描写の外側にあると考えられる、話者の何らかの判断を表現する働きまで持つもの

備前(1989: p.1)

とに区別し、それぞれについて更にさまざまな用法に分類している。この1が形式名詞の「こと」+コピュラの「だ」で、2がモダリティを含む「ことだ」であるが、備前は2を更に以下の8つの用法に分類している。

- (2) a. 「～することだ」の部分が「～することが大切だ」の意味を持っているもの
- b. 命令禁止
- c. 感嘆・感動を表現するもの
- d. 伝聞
- e. 後に続く部分の理由や根拠になっているもの
- f. 前の部分の言い換えや要約になっているもの
- g. 推量・推定
- h. 女性語的な終助詞

備前（1989: p.6）

ただし、備前によるそれぞれの例には「ことだ」「ことです」「こと」「ことでしょう」等が混じって入っているので、以下には筆者による「ことだ」の形の例をあげておく¹⁾ ((3d) のみ備前による例)。

- (3) a. フランス語が話せるようになりたいなら、フランス人の友達を作ることだ。
b. 食堂では騒がないこと。
c. 車にはねられてよくかすり傷ですんだことだ。
d. 中国で箸が発明された年代は正確に分からないけれども、紀元前のことらしい。はじめスープの中の実を取り上げるのに、木の枝を削った串で突っいていたのだが能率が悪いので枝を二本用いるアイデアが歓迎されたのではないか、ということだ。
e. 彼ももう二度と宿題は忘れないと言っていることだ。今回は特別に許してあげたらどうだ？
f. 1000人の人にアンケートをした結果、735人が将来について不安だと答えた。つまり、約4分の3の人が不安を感じているということだ。
g. 昔はこの辺りも緑が多かったことだろう。
h. 広いおうちだこと。

なお、b・h の用法は「こと」、g の用法は「ことだろう」「ことと思う」という形を取るため以下の議論では除外する。

上記の例を見ると、(3d,e,f) の「こと」は「事柄」を表す「こと」と言って言えないこともなく、(3a,c) ほどモダリティ性が感じられない。にもかかわらず、(3d,e,f) も確かに(2)で示されたような用法を持つ文であるように見える。寺村や佐治が(3a,c)で示されるような用法のみを文末の「ことだ」の用法としてあげているのも、(3d,e,f)の「こと」にモダリティ性を見出さなかったためと思われる。

ここで、辞書の扱いはどうなっているだろうか。『角川国語大辞典』(1971)、『大辞林』(1988)を見ると a²⁾,d の用法が載せられている。これらでは c,e,f の用法は「こと」の意味で集約されていると思われる。『日本国語大辞典』(1974)、『現代語の助詞・助動詞－用法と実例－』(1982)、『日本文法大辞典』(1971)では「ことだ」という形では特に触れられていなかった。このように「ことだ」全体として意味を載せている辞書はあまり見られない。

「ことだ」の意味については、木坂(1988)に興味深い記述がある。「早く行くことだ」という文について、「『こと』表現は、前件を抽象化普遍化して一度距離をおくことによって確かな真理として印象づけて行動を実現させようとする」とした上で、「「間に合うためには」「助かるためには」とか「君のなすべきことは」などの主題化されたものに応じ、

「もし行かなかったら、何がおこっても話者の責任をはなれる」という意味を付与する」（木坂1988: p.424）と説明している。これは「「～することが大切だ」の意味を持つ用法」についてのみ述べられているが、この「主題化」の考え方は本稿におけるこれ以後の議論に大いに関係している。また、「確かな真理として印象づけて行動を実現させようとする」とまで言えるかはわからないが、「（抽象化普遍化して）一度距離をおく」ことは、理由や根拠を表す用法での議論に関係することになる。

筆者は「ことだ」にはそれ自体強く一体化していてかなり高いモダリティ性を持つものと、モダリティ性はあまり感じられないが全くの形式名詞の「こと」+コピュラの「だ」とは言いにくいようなものがあるのではないかと考える。本稿ではこれらのことを念頭に置いて、まず「こと」自体の意味を考えてから「ことだ」についての仮説を立て、(2)であげられた用法の中から「ことだ」の形を取る5つについて検証していくことにする。

2. 「こと」の意味

まず、国語辞典の「こと」についての記述をいくつか引用する。

「もの」が一般に形を備えた物体を基本としているのに対して、そういうものの働き、性質、あるいはものとの関係、また、形のつかみにくい現象などを表現する語
「①人のするわざ、行為」

『日本国語大辞典』（1974: p.264）

人間の生活や環境の中に起こったり人間が行ったりする事柄。出来事やしわざ。

『角川国語大辞典』（1983: p.759）

人間が経験・想像する対象のうちで、時間の推移と共に変化して行くと考えられるもの。
また、その変化の過程。

『新明解国語辞典第四版』（1989: p.442）

「もの」が何らかの作用・状態・関係などとして実現することをいう語。「もの」が時間的に不変な実体のようにとらえられているのに対して、「こと」は生起・消滅する現象としてとらえられている。

『大辞林』（1988: p.893）

また池上（1981: p.260-261）では「『コト』は『モノ』との対立において『時間的に推移し、進行して行く出来事や行為』（大野1974: p.29）、ないしは「非原理的、可変的、一回的」（荒木1980: p.121）なことを表していたと言う」、原田（1991: p.13）では「事件、事態、事実、事情など人間生活の中で時間の推移とともに発生し、変化し、存在する現象」

と述べられている。

次に「××ということ」の「××」にどんな表現が来るかを、「○○というもの」との比較で考察したものに、柊山（1990）寺村（1992）がある。柊山（1990）によると、(4)の「蔵書カードの研究」は「蔵書カードを研究する」、「何千万の国民」は「何千万(も)の国民がいる」から各々名詞化されてできた表現であると考えられ、「××ということ」の「××」の部分には「述語（即ち、動詞か形容詞か形容動詞）を含む表現」あるいは「述語を含む表現」が「名詞化」されたものが入るとしており、寺村（1992）も「表面的には名詞であっても内容的には文で表される」としている。つまり、本来「××」の部分は(5a,b)のように「述語を含む表現」が入るもので、(4)のように表面上名詞が入っていても、それは元は「述語を含む表現」だったということであり、筆者もこれを支持する³⁾。

- (4) a. 蔵書カードの研究ということは非常に興味もあり有益なものである。

（田中菊雄「現代読書法」）

- b. ……ひとりの裁判官でさえこうなんだから、何千万の国民ということを考えた場合、プロ野球が与えている社会的恩恵の大きさははかりしれないものがある。

（下田武三「プロ野球回想録」）

柊山（1990: p.17）

- (5) a. 彼女が結婚するということを会社で知らない人はいない。
b. 昨日うちの子が友達を殴ったということは、すぐ近所に広まった。
c. こんなに急激な変化というものを私は見たことがない。
d. 強盗事件というものは、なかなかなくなるものである。

以上の先行研究より、「こと」について「もの」との比較において考えてみるなら、「もの」が「時間軸とは関係なしに存在する不変的な存在」であるのに対し⁴⁾「こと」は「時間軸に沿って起こり、経過し、存在し、消滅する現象・事象である」ということが言える。また、(5)では「(文)ということ」「(名詞)というもの」の形になっており、「こと」の場合、文で表されることによって内容が認識・把握される。これにより、存在である「もの」はことばがなくてもその存在を認識できるが、現象・事象である「こと」はことばを使って思考のようなプロセスを通してはじめて把握される。

以後の考察で言う「こと」は「時間軸に沿って推移するもので、ことばを使って思考のようなプロセスを通してはじめて把握される現象・事象」を表すものとする。

3. 「ことだ」の意味

文末に来る「ことだ」を考える場合、形式名詞の「こと」+コピュラの「だ」の場合に

は、「こと」は元々その文の中、あるいは文脈において、必ずそれが指すことがらがある。
例えば以下の文では、

- (6) a. ビッグスリーの政治的結束の中で注目されるのは（中略）フォードやクライスラーとは一線を画してきたGMが、この流れに加わったことだ。

（中日新聞1993年8月25日）

- b. いま、「国の時代」から「都市の時代」への大転換が始まろうとしている。
それは、国のなかにあり、国の支配・コントロール下に置かれていた都市が、
国の枠を越えた都市間ネットワークにより、「国以上の国」を作り出そうと
する動きのことだ。

（中日新聞1993年10月24日）

文末の「こと」は、(6a)では「ビッグスリーの政治的結束の中で注目されるの」を指し、(6b)では「それは」という主題を受けているが、仮に「それは」をなくしたとしたら「こと」は前文の点線部分を受ける。つまり「国の時代」から「都市の時代」への大転換は、国のなかにあり、国の支配・コントロール下に置かれていた都市が、国の枠を越えた都市間ネットワークにより、「国以上の国」を作り出そうとする動きのことだ。」と言い換えることができる。このように「こと」は単文の範囲を越えて文脈の中でそれが指すもの、すなわち主題部分を持ち得る。つまり「XはYだ」の形でYに用言が来た時、それを名詞の形にするために「こと」を使い、主題Xは文の中に明示されていなくとも、文脈の中で「こと」に対応するものとして存在する。筆者はこの「こと」の用法の先行する事柄が何らかの理由で省略され、明確には何を指し示すかがわからなくなって、(2)のような用法になったと考える。その「何らかの理由」とは省略されても意味が通じること、つまり、聞き手にとって何のことを言っているのかという認識があることで、その場合に省略が可能になる。また、この省略された先行することがら（主題部分）は、復元しやすい場合からほとんど存在が感じられない場合まで、様々な場合が考えられる。そこで、以下のような仮説を立ててみる。

(7) 〈仮説〉

- ①「XはYだ」という構文の「Xは」の部分は話し手・聞き手双方が認識可能な場合に省略され、「こと(だ)」はその省略された主題に対応するものとして存在する。
- ②「ことだ」の各用法はその主題の復元のしやすさの程度に差があり、よってそのモダリティ度にも違いがある。

「ことだ」の主題が省略されることにより、文が不完全なものになり、それによって、「ことだ」がいろいろな意味を持っているかのように見えるのではないかと考える。以後、(2)の用法を基に考察を進めていくが、まずモダリティ的要素がさほど感じられない(2 d,e,f)の用法⁵⁾について検証し、それから(2a,c)の用法へと進める。尚、考察するにあたり、各用法のモダリティ度⁶⁾についても調べ、参考にしていく。

3-1. 伝聞の用法

伝聞の用法は「ということだ」「とのことだ」の形で使われる。この形は、新聞などで使われる「という」の形に近いものであると考えられる。ということは「こと」自体には伝聞の意味はないということになる。益岡・田窪(1992: p.131)に、『『という』は一般的に言われていることを、『ということだ』『とのことだ』は、特定の人物からの情報を表す」とある。確かに一般的に言われていることの場合、「という」の形が使われることが多いようだが、(8c)のように特定の人物からの情報でも、「ということだ」「という」共に使えることを考えると、必ずしもそうとは言えないようである。(8a,b)は特定の人物からの情報ともそうでないともとれるが、「ということだ」「という」が共に使用可能である。ひとつ言えることは、話しことばでは「こと」が省略不可であるということである。つまり「という」は書きことば専用語と言える⁷⁾。

- (8) a. 9時ちょうど、幕が上がった。(中略)そしてローラが先生になったところで幕が閉じた。その後は、みんな出演者のまわりに集まり、写真を撮ったり名前入りのカードをもらったり、たいへんな騒ぎだ。彼等は完全にスターだった。この日は劇のある最後の週とあって、1200人ぐらい集まったとのことだ／という。
(「地球の歩き方②アメリカ」)
- b. 街の中心から南東へ2、ローガンズ・ビーチは、毎年5～10月、Southern Right Whalesと呼ばれる鯨が見られることで知られている。(中略)肉眼でも見えるけど、双眼鏡を持っていくと、さらにディテールまで見えてベター。朝、もしくは夕方5時頃が一番よく見えるということだけど、昼過ぎでも、ちゃんと見えました。／朝、もしくは夕方5時頃が一番よく見えるという。
だが、・・・
(「地球の歩き方④オーストラリア」)
- c. 先日「井上」と名乗る人がやってきた。彼は亡くなった父の昔の友人で、今はレストランを経営しているということだ／という。

「ということだ」の文は、文のはじめにいきなり現れることはなく、何らかの情報があってそれを受けてこのような文が発せられる。(8a)では劇の終了後、多くの客でたいへん

な騒ぎになったことが、(8b)はローガンズ・ビーチでの鯨見物についての基本情報が、また(8c)は「井上」という人が来たことがその前に示されている。電話のメモなどでも「～さんから電話があって、お電話くださいということだよ」のように、まず「電話があった」という情報が与えられ、次の「お電話くださいということだよ」の前には「その電話で私が聞いたことは」のような主題が省略されていると考えるのである。このように、伝聞の意味になる場合は、情報源がまずどこかにあって、「自分が情報を得たそのことはこういうことである」と相手に伝える文であると言える。つまり、「こと」自体に伝聞の意味があるのではなくて、(8)の場合で言うと「私がその劇(の客)について聞いたことは」「私が鯨見物について得た情報は」「井上」から聞いたことは」のような主題が省略されていて、それを受けるものとして「～こと」があるものと思われる。この場合の「ことだ」は「こと」が各文脈の中で受けるものを比較的容易に指定することができる。つまり主題部分の復元は比較的容易である。

伝聞の用法は(9)に示すように過去形にすることはできるが、疑問形・否定形にはすることはできない。しかし、主題の復元のしやすさから言えば、比較的復元しやすいということから、モダリティ度は中程度と言える⁸⁾。

- (9) a. 田中さんが幸子さんと結婚するということだ。
- b. 田中さんが幸子さんと結婚することだった。
- c. *田中さんが幸子さんと結婚することですか。
- d. *田中さんが幸子さんと結婚することではない。
- cf. 田中さん、幸子さんと結婚しないということだ。

3-2. 理由や根拠を表す用法

備前によると、後に続く部分の理由や根拠になっているものは「～だから」で結び付けることのできるものである。

- (10) a. 彼も二度とこんなことはしないと言っていることだ。今回は許してやろう。
- b. イギリスへ一人で行くといっても、おばさんが向こうにいることだし、心配しなくても大丈夫だよ。

聞き手・読み手も認識している主題が省略されていて、それを受けるものと見ると、(10a)は「(我々の前に今起こっているこの現状／事柄は)彼も二度とこんなことはしないと言っていること(=現状／事柄)だ。(だから)今回は許してやろう」、(10b)は「イギリスへ一人で行くといっても、(行ったときの状況／事態は)おばさんが向こうにいる

こと(＝状況／事態)だ。(だから)心配しなくても大丈夫だよ」の意味だと考えられる。このように主題部分は復元可能であるが、かなり漠然としたものとなる。また、(11)に示すように過去形・疑問形・否定形にすることはできず、「ことだ」という形のみで使われることから、モダリティ度は高いものと見られる。

- (11) a. 彼はもう二度とこんなことはしないと言っていることだ。
b. *彼はもう二度とこんなことはしないと言っていることだった。
c. *彼はもう二度とこんなことはしないと言っていることですか。
d. *彼はもう二度とこんなことはしないと言っていることではない。

この「こと」は、実は省略しても内容的な意味の違いはさほど見出せない。

- (10) a'. 彼ももう二度とこんなことはしないと言っている。今回は許してやろう。
b'. イギリスへ一人で行くといっても、おばさんが向こうにいるし、心配しなくても大丈夫だよ。

つまり、この「こと」はそれ自身が後に続く部分の理由や根拠になるという意味を持つわけではない⁹⁾。では「こと」はどういう役割を果たしているのだろうか。(10)を見てみると、理由の述べ方が、「ことだ」を入れない(10)'はストレートであるのに対し、「ことだ」を入れた(10)の方が話者が事態からやや距離をとり、主観的印象を与えるのを避けたような感じを受ける。つまり「こと」をつけることによってより客観性を加えて述べようとしているように見える。「こと」を付けることにより事柄としてはっきり認定し、前接する文を「時間的に推移し進行していく出来事や行為」としてマークして、客観性を持たせていると考えられる。そしてそのことで、「これは私が主観で言っていることではない」というニュアンスを付け加えることになるのではないか。一方、「ことだ」が入っていない文では、そのような「主観回避」的なニュアンスは含まれず、ストレートな表現になる。これは先に述べた木坂(1988)で、「早く行くことだ」の「こと」が「(抽象化普遍化して)一度距離をおく」という見解にも共通する。

「ことだ」が客観性すなわち「主観回避」的なニュアンスを付け加えると考えられる理由の一つに、「こと」が全くの主観を表す文には付きにくいという事実がある。「～し、・・・」の構文で、表面上、前件が理由、後件が結果を表しているように見える場合があるが、その多くの場合で「こと」を入れることができる。しかし、(12a、b)のように、主語が「私」で「好きだ」「びっくりした」等の話者の感情を表す述語が来た場合、「ことだ」は付きにくい。一方、(12a'、b')のように話者以外の人が主語で、話者が客観的に観察・

把握可能なことがらとは「ことだ」は共起する。また、「私」が主語の場合でも(13)のように話者の感情を表すのではなく、事実を述べた文では「ことだ」は使われる。

- (12) a. 私はケーキが好きだし／??好きなことだし、ダイエットはできないだろう。
a'. 彼はケーキが好きだし／好きなことだし、ダイエットはできないだろう。
b. (私は) この会社の不誠実さにはびっくりしたし／??びっくりしたことだし、もう辞めようと思っています。
b'. 両親もこの会社の不誠実さにはびっくりしたし／びっくりしたことだし、もう辞めようと思っています。
- (13) (私は) 論文で忙しいし／忙しいことだし、パーティーへ行くのはやめておくわ。

以上、(12)(13)の例により「ことだ」は全くの主観を表す文とは共起しないということを示し、「ことだ」が「主観回避」的なニュアンスを付け加えると言う機能を持つことを示唆した。

3-3. 言い換え・要約を表す用法

- (14) a. 北半球と南半球では季節が逆だ。北半球で夏なら、南半球では冬になる。つまり、オーストラリアでは真夏にクリスマスがやってくるということだ。
b. 中国では結婚しても妻が夫と同じ名字になるということはない。夫婦別姓ということだ。

前の部分の言い換えや要約になっているものも「ということだ」という形を取る。省略された主題は、(14a)が「北半球と南半球では季節が逆であるということは」、(14b)が「結婚しても妻が夫と同じ名字になるということはないということは」であり、これも話し手・聞き手双方が認識しているために省略できるのである。この用法は、省略された主題を容易に見つけることができ、かなり形式名詞の「こと」に近い。また、疑問形・否定形にすることはできるが、過去形は言い換え・要約という用法の性格上、不自然になる。これにより、この用法のモダリティ度はかなり低いと言える。

- (15) a. 中国では結婚しても妻が夫と同じ名字になることはなかった。夫婦別姓ということだ。
b. ??夫婦別姓ということだった。
c. 夫婦別姓ということですか。
d. 夫婦別姓ということではない。

3-4. 「～することが大切／必要だ」の意味を表す用法

(16) a. 日本は“手負い”のイランを相手にすることになった。韓国に0-3と敗れたイランにとって、次の一敗は本大会出場に黄信号がともることを意味する。となれば「勝つ」以外に道はなく、しゃにむに攻撃をかけてこよう。まず、精神的に負けないことだ。 (中日新聞1993年10月18日)

b. 今中に言わせると「精神と言われても何をどうやったら強くなるんやろ。これも分からん」まずは満腹感を一日も早く一掃することか。「結局は一生懸命練習するということやな (=ことだな)。本当は分かっているんです」 (中日新聞1993年11月2日)

これを仮説に従って考えてみると、(16a)における先行文は、日本が次に当たるイランについて述べている。よって主題として「私が今イランとの試合について言いたいことは」のようなものが考えられるのではないか。そこから、「イランとの試合で勝つために大切なことは、まず、精神的に負けないことだ」という意味が生まれるのだと思われる。また、(16b)は文脈の中で「精神と言われても何をどうやったら強くなるんやろ」という文を受けて「精神を強くすることとは」という主題が隠れているものと思われる。そして、「精神を強くすることとは、結局は一生懸命練習することだ。だから、一生懸命練習することが大切だ」の意味になる。

しかしこのような主題としての意識は、この用法ではほとんどなくなっていて、「ことだ」自身があたかも「～することが大切だ／必要だ」の意味を持っているかのように使用されている、つまり、助動詞化してモダリティを含むようになってきているということは否めない。だが、そうだとすると「こと」の先行文、先行状況は、聞き手・読み手も認識しているものでなければならず、「ことだ」の文は先行して示されている事柄についての自分の考えを述べる内容であるのは間違いない。そこで、この用法の主題として「私が今〈先行文・先行状況について〉言いたいことは」といったものが考えられ、そこから「〈先行文・先行状況において〉大切なことは」という主題が隠れているかのように認識されるのだと考える。ただし、(16)の例のように個々の文脈の中で「XはYだ」の「X」を特定することは容易であるとは言えない。

この用法は過去形・疑問形・否定形を持たず、モダリティ度は高いと言える。

- (17) a. 大学に入りたいのなら、一生懸命勉強することだ。
b. *大学に入りたいのなら、一生懸命勉強ことだった。
c. *大学に入りたいのなら、一生懸命勉強ことですか。
d. *大学に入りたいのなら、一生懸命勉強ことではない。

ここで、次の例を見ると、「ことだ」の意味は微妙である。

(18) A1「尾崎さん、税務調査の事前予告を受けた場合の注意というのがありますか」

B1「事前予告があったら、個人の場合は当人、法人だったら、社長と経理担当者が、税務署の関係部門の統括官（課長クラス）と調査担当者に連絡して、時間を打合わせて、あいさつに行くようにします」

A2「なるほど、税務署に対して、協力的な態度を打出すことですね」

B2「行ったら、「前もって準備しておくことはないでしょうか」といって準備しておく、署員の感触も違います」

A3「私のいないときは、誰だれに連絡して下さいと、社の連絡についても密にしておくことですね」

B3「そうですよ」

A4「調査終了時の心構えはありますか」

B4「「お忙しいところを、いろいろお手数をお掛けしました。今後共よろしくご指導をお願いします」とあいさつをすることです」

泉欣七郎『税務署と仲良くする法』

A2の「ことだ」は言い換え・要約を表す用法だが、A3の「ことだ」は「～することが必要だ」の意味とも取れるし、文脈の中で「税務調査の事前予告を受けた場合の注意」を受けているとも言える。B4の「こと」も「～することが必要だ」の意味とも取れるし、「調査終了時の心構え」を受けているようにも取れる。このように、ある文脈の中で、形式名詞の「こと」＋「だ」と、助動詞化したモダリティを含む「ことだ」の両方の捉え方ができる場合もある。

「～することが大切／必要だ」の意味を表す用法は「当為」の用法とも言われることがある。これまでの考察から考えると、言われた相手がその意志によって、「ことだ」に先行する部分が表す内容を達成できなければならないと考えられる。そうであれば、「ことだ」の前に〔＋自制的〕な語句が来る必要がありそうだが、実際は(19)のように〔－自制的〕な語句も入り得る。これは「こと」がある主題を受けるものであり「ことだ」自体が聞き手に対する当為の意味を持つものではないためであろう。

(19) a. このところの長雨で葡萄の糖度が上がらない。補糖を考えるのもいいが、まず太陽が顔を見せてくれることだ。

〔－自制的〕

b. 会社が持ち直すには、まず円が安くなることだ。

〔－自制的〕

「－自制的」であるか「＋自制的」であるかは、文の解釈に関わる。「こと」の前に「＋自制的」な語句が来れば当為の解釈が可能になるが、「－自制的」な語句の場合、その必要性の記述という解釈になる。

3-5. 感嘆・感動を表す用法¹⁰⁾

(20) a. 車にはねられてよくかすり傷ですんだことだ。(=(3c))

b. (遊んでいる子供を見て) 本当に元気なことだ。

本用法においても「～することが大切／必要だ」の意味を表す用法と同じく、「私が今〈先行文・先行状況について〉言いたいことは」という主題を考えると、(20)のような文脈においては「〈先行文・先行状況において〉感動したことは」という言葉に置き換えられる。この感嘆・感動を表す用法においても先行して何らかの「事柄・事態」があってはじめて「こと」で受けるこのような発話が得られる。しかし、この主題は文脈上明示されてはおらず、文脈に基づいて明確に言葉で主題を言い表すことは困難である。

また、(21)のように疑問形・否定形にすることはできず、過去形も不自然なことにより、モダリティ度は高いと言える。

(21) a. 父は身の回りのことを何もしないで、全部母がしている。本当に世話がやけることだ。

b. ??本当に世話がやけることだった。

cf. 本当に世話がやけたことだ。

c. *本当に世話がやけることですか。

d. *本当に世話がやけることじゃない。

同じように感嘆を表すように見えても「こと」が文字化された主題を受けている場合もある。

(22) 「社長、△△が倒産しましたね」

「うん、新聞でみたよ。わが社も税金が高い高いといいながらも、こうしてどうか仕事もあって、はたらいていけるのはありがたいことだね」

(全国法人会総連合(編)「社長の四季」)

この文は次のように言うこともできる。

(22)' 「社長、△△が倒産しましたね」

「うん、新聞でみたよ。わが社も税金が高い高いといいながらも、こうしてどうにか仕事もあって、はたらいていける。ありがたいことだね」

しかし、「ありがたいことだ」という表現は文脈によっては「・・・仕事もあって、はたらいていけた。ありがたいことだったね」のように過去形で言えるが、一方で「?ありがたいことですか」「?ありがたいことじゃない」という疑問形・否定形はやや不自然であり、形式名詞の「こと」+「だ」とは言いにくい。これは感動・感嘆を表す「ことだ」と言ってもいいものである。つまり、この用法においては形式名詞の「こと」+「だ」に近いものと助動詞化した「ことだ」と言えるものがあると思われる。

4. まとめ

「こと」は、「時間軸に沿って推移するもので、ことばを使って思考のようなプロセスを通してはじめて把握される事象である」という意味を持つというところから始まり、備前（1989）によって提案された8つの用法のうち、「ことだ」の形を取る5つの用法について「①「XはYだ」という構文の「Xは」の部分は話し手・聞き手双方に認識可能な場合に省略され、「こと(だ)」はその省略された主題に対応するものとして存在する」「②「ことだ」の各用法はその主題の復元のしやすさの程度に差があり、よってそのモダリティ度にも違いがある」という仮説の検証をしてきた。まず①の仮説については、各用法で先行する事柄、あるいは先行状況が復元可能なことが確認できた。つまり、話し手・聞き手双方が認識している事象についてのみ、主題となるべきものが省略され、この「ことだ」の構文が使えるのである。そして、その主題が省略されることにより、文が不完全なものになり、それによって「ことだ」がいろいろな意味を持っているかのように見えるのだと思われる。理由や根拠を表す「ことだ」については、内容上は省略可能であるが、それを付けることで、話し手がその命題に客観性、すなわち「これは私が主観で言っていることではない」という「主観回避」的なニュアンスを加えて述べるという意味合いを付与する。

②の仮説については、各用法について見てきた主題の復元・特定のしやすさ、モダリティ度によって、「ことだ」の用法を一つの線上に並べることができると考えられる。つまり、各用法は先行する事柄、あるいは先行状況が必要であるという共通性はあるものの、それを受けての「こと」であるという意識が話し手・聞き手共にほとんどなくなり、「ことだ」が助動詞化して「ことだ」そのものがある意味を持っているかに見えるもの、すなわち、主題の復元が容易でなくモダリティ度も高いものから、形式名詞の「こと」に近いもの、すなわち、主題の復元が比較的容易でモダリティ度が低いものまでいろいろあった。各用法について、主題の復元のしやすさと、過去形・疑問形・否定形にできるかどうかという

形の制約をまとめたものが表1である。

表1 各用法の主題復元のしやすさと形の制約

	大切・必要	理由・根拠	感嘆・感動	伝聞	言換・要約
主題復元	容易でない	容易でない	容易でない	比較的容易	容易
過去形	×	×	??	○	??
疑問形	×	×	×	×	○
否定形	×	×	×	×	○

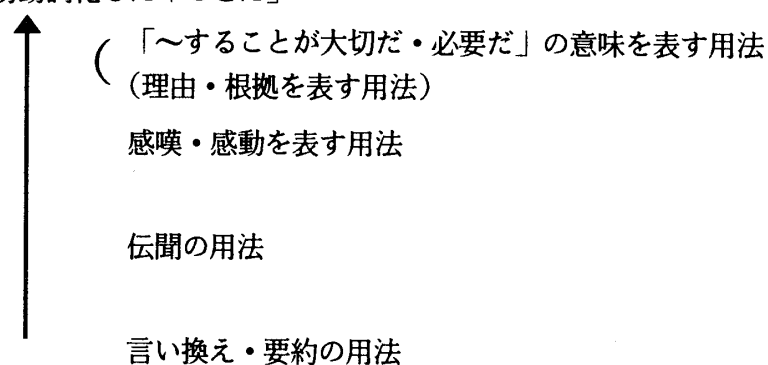
表の「×」はその形にできないこと、○はその形にできることを表す。

また「??」は不自然であることを表す。

これによると「～することが大切／必要だ」の意味を表す用法、理由・根拠を表す用法が、最も助動詞化が進んでいることがわかる。ただし、理由・根拠を表す用法は「ことだ」で助動詞として理由や根拠を表すというより、「こと」が「主観回避」的なニュアンスを加えていると考えた方がいい。大差はないが、これらに続くのが感嘆・感動を表す用法である。5つの中では言い換え・要約の用法が最も形式名詞に近く、これと先の用法との間に伝聞の用法がある、ということになる。つまり、図1に示すように、「ことだ」の用法は、形式名詞「こと」+「だ」から助動詞化した「ことだ」への連続した線上のいろいろな位置に点在すると言えよう。

図1

助動詞化した「ことだ」



形式名詞「こと」+「だ」

謝辞

本稿の執筆に当たり、ICU平田泉先生にご指導・ご助言を賜った。また、ICU飛田良文先

生、南山大学の曾我松男先生には貴重なご意見をいただいた。記して感謝の意を表したい。

注

- 1) 「こと」「ことだろう」はモダリティ度を考える上で、別に議論した方がいいと考え、本稿では扱わないことにする。なお、「ことだ」と「ことです」は丁寧度の違う形で、意味的には同じものとする。
- 2) ただし『角川国語大辞典』では「～することが大切だ」の意味としては載っておらず、「後生ほど大事なものは無いと思ふことぢゃ」という例文を出して「断定を強める」としている。
- 3) (4) は「もの」に置き換えることもできるが、この場合は「述語を含む表現の名詞化されたもの」ではなく、元々名詞としてとらえられているとしている。柊山（1990）参照。
- 4) 「もの」「ものだ」については坪根（1994）を参照されたい。
- 5) この3つはいずれも「～ということだ」の形を取り、「という」の意味も関わるかもしれないが、ここでは「ことだ」の議論に留めたい。
- 6) モダリティ度については、今井（1992）の研究があり、その形式が過去形・疑問形・否定形になるかどうか、従属節のなかに収まるか、接続助詞への接続の仕方、でモダリティ度の高低を測っている。モダリティを表すものの中にも「そんな風に言うものじゃない」のように否定の形を持つものもあるが、過去形・疑問形・否定形にできなければ普通の形式名詞ではないと言えることから、モダリティ度の高低を測る指針にはなると考え、参考として各用法のモダリティ度について考えていくことにする。
- 7) 書きことばでも、形式が話しことばに近い伝言メモなどでは「という」の形は使えない。
- 8) 「ということだ」は伝聞の「そうだ」に置き換えられる場合と、そうでない場合がある。
 - a. 田中さんに聞いたんだけど、彼、幸子さんと結婚することだよ／結婚するそうだよ。
 - b. はじめスープの中の実を取り上げるのに、木の枝を削った串で突っついていたのだが能率が悪いので枝を二本用いるアイデアが歓迎されたのではないかと、ということだ。（＝3d）／*のではないかと、そうだ。
 - c. これをきっかけに男と話が始まった。彼はルイジアナ州のある街の警官であって、妻子をそこに残したまま、現在は陸軍に入隊中で、カリフォルニアで訓練を受けているとのことだった／*受けているそうだった。（藤原正彦「若き数学者のアメリカ」）

bのように伝聞の「そうだ」は、引用したものをそのまま受けて使うことはできないが、「ということだ」はできる。即ち、「ということだ」の「と」は元々引用を表す助詞なので「ということだ」が引用したものをそのまま受けることができるのである。また cのように伝聞を過去のこととして記述する場合、「～そうでした」とは言えない。ただし伝聞の「そうだ」の過去形について、今井（1992: p.65）は用例の存在を指摘し以下の例をあげている。

どうせ無駄とは知りながら、先生は会計にそう云って、失踪者の住所書を頼りに尋ねさせた。案の定、そんな人は町内に住んでいないそうであった。（井伏鱒二「本日休診」）

しかし、存在としては認めてもやはり不自然であり、ほとんどの場合に過去形になり得ないことを考え、「そうだ」は過去形を持たないと考える。

9)省略しても理由や根拠を表すように見えるからと言って、「から」に理由を表す意味がないと言うわけではない。省略した形では文脈からそれと察するのみだが、「から」は明確な理由を表すマーカーであり、これを付けることにより理由にはっきりフォーカスをあてることができる。

10)感情の動き全般を表し、肯定的な感情だけでなく、あきれなどの否定的な感情も含む。

参考文献

- 池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—』、大修館書店
- 今井新悟（1992）「モダリティ形式のモダリティ度」『日本語教育』77号、pp.62-75
- 木坂基（1988）『近代文章成立の諸相』、和泉書院
- 国立国語研究所（1987）『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—（第八版）』、秀英出版
- 佐治圭三（1991）『日本語の文法の研究』、ひつじ書房
- 田中章夫（1964）「～するわけだ・～することだ」 森岡健二、永野賢、宮地裕、市川孝（編）『口語文法講座3 ゆれている文法』、pp.182-192、明治書院
- 坪根由香里（1994a）『『もの』『こと』『の』に関する考察 —その意義素を求めて—』、未公刊修士論文、南山大学
- 坪根由香里（1994b）『『ものだ』に関する一考察』『日本語教育』84号、pp.65-77
- 寺村秀夫（1981）『『モノ』と『コト』』『馬淵和夫博士退官記念国語学論文集』、pp.743-763、大修館書店
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味第Ⅱ巻』、くろしお出版
- 寺村秀夫（1992）『寺村秀夫論文集—日本語文法編—』、くろしお出版
- 原田登美、小谷博泰（1991）「日本語『もの』と『こと』」『甲南大学紀要文学編84 国

文学特集』、pp.1-34

備前徹（1989）「『～ことだ』の名詞述語文に関する一考察」『滋賀大学教育学部紀要
人文科学・社会科学・教育科学No.39』、pp.1-12

益岡隆志、田窪行則（1992）『基礎日本語文法－改訂版－』、くろしお出版

舩山洋介（1990）「現代日本語『モノ』の諸相」『Litteratura11』、pp.1-27、名古屋工
業大学外国語教室

金田一京助、柴田武、山田明雄、山田忠雄〔主幹〕（編）（1991）『新明解国語辞典（第
四版）』、三省堂

時枝誠記、吉田精一（編）（1983）『角川国語大辞典』、角川書店

日本大辞典刊行会（編）（1974）『日本国語大辞典』、小学館

松村明（編）（1971）『日本文法大辞典』、明治書院

松村明（編）（1988）『大辞林』、三省堂